

深川淺景

泉鏡太郎

青空文庫

あまあがり 雨 霽の梅雨空、曇つてはゐるが大分蒸し暑い。——日和癖で、何時ぱらくと
 こ 來ようも知れないから、案内者の同伴も、私も、各自蝙蝠傘……いはゆる洋傘と
 は名のれないのを——色の黒いのに、日もさくはないし、誰に憚るともなく、すぼめて杖に
 つき、足駄で泥濘をこねてゐる。……
 いで、戰場に臨む時は、雑兵と雖も陣笠をいたゞく。峰入の山伏は貝を
 吹く。時節がら、槍、白馬といへば、モダンとかいふ女でも金剛杖がひと通り。……
 じんせいやし 人生苟くも永代を渡つて、辰巳の風に吹かれようといふのに、足駄に蝙蝠傘は何
 事だ。

何うした事か、今年夏帽子が格安だつたから、麥稈だけは新しいのをとゝのへ
 たが、さつと降つたら、さそくにふところへねぢ込まうし、風に取り立ては事だ……ち
 よつと意氣にはかぶれない。「吹きますよ。ご用心。」「心得た。」で、耳へがつし
 りとはめた、シテ、ワキ兩一人。

あゐ 藍なり、紺なり、萬筋どころの單衣に、少々綿入の紹の羽織。紺と白たびで、ば
 しやくとはねを上げながら、「それ又水たまりでござる。」「如何にも沼にて候。」と、

鷺歩行に腰を捻つて行く。……といふのでは、深川見物も落着く處は大概知れてゐる。はま鍋、あをやぎの時節でなし、鱒汁は可恐しい、せい／＼門前あたりの蕎麥屋か、境内の團子屋で、雑煮のぬきで饅ごと正宗の爛であらう。従つて、洲崎だの、仲町だの、諸入費の懸かる場所へは、強ひて御案内申さないから、讀者は安心をなすつてよい。

さて色氣抜きとなれば、何うだらう。(そばに置いてきぬことわりや夏羽織)と古俳句にもある。羽織をたゝんでふところへ突つ込んで、空すねの尻端折が、一層薩張でよからうと思つたが、女房が産氣づいて産婆のところへかけ出すのではない。今日は日新聞社の社用で出て來た。お勤めがらに對しても、聊か取つくるはずはあるべからずと、胸のひもだけはきちんとしてゐて……暑いから時々／＼だらける。……

「——旦那、どこへおいでなさるんで？ は、ちよつとこたへたよ。」

と私がいふと、同伴は蝙蝠傘のさきで爪皮を突きながら、

「——そこを眞直が福島橋で、そのさきが、お不動様ですよ、と圓タクのがいひましたね。」

今しがた、永代橋を渡つた處で、よしと扉を開けて、あの、人と車と梭を投げて織

違ふ、さながら繁昌記の眞中へこぼれて出て、餘りその邊のかはりやうに、ぼかんとして立つた時であつた。「鮪や黒鯛のぴち／＼はねる、夜店の立つ、……魚市の處は？」「あの、火の見の下、黒江町……」と同伴が指さしをする、その火の見が、下へ往來を泳がせて、すつと開いて、遠くなるやうに見えるまで、人あしは流れて、橋袂が廣い。

私は、實は震災のあと、永代橋を渡つたのは、その日をはじめでつたのである。ふたりの風恰好亦如件……で、運轉手が前途を案じてくれたのに無理はない。「いや、たゞ、ぶらつくので。」とばかり申し合はせた如く、麥稈をゆり直して、そこで、左へ佐賀町の方へ入つたのであるが。

さて、かうたゞむうちにも、ぐわらく、ぐわらとすさまじい音を立てて、貨物車が道を打ちひしいで駆け通る。それあぶない、とよけるあとから、又ぐわらくと鳴つて来る。どしん、ぶん／＼づづんと響く。

焼け土がまだそれなりのもあるらしい、道悪を縫つて入ると、その癢、人通も少く、バラツク建は軒まばらに、隅を取つて、妙にさみしい。

休業のはり札して、ぴたりと扉をとぎした、何とか銀行の窓々が、觀念の眼

をふさいだやうに、灰色はひいろにねむつてゐるのを、近所きんじよの女房かみさんらしいのが、白いエプロンしろの薄うすよごれた服装なりで、まだ二時半前やつまへだのに、青あをくあせた門柱もんちゆうに寄り添よつて、然さも夕暮ゆふぐれらしく、曇くもり空ぞらを仰あふぐも、ものあはれ。……鳴かめめのかはりに鳥からすが飛とぼう。町筋まちすぢを通して透すいて見える、流れながの水みづは皆黒みなろい。……

銀行ぎんかうを横よこにして、片側かたがはは焼やけ原はらの正しやうめん面に、野中のなかの一軒家いつけんやの如ごとく、長方形ちやうほうけいに立たつた假普請かりふしんの洋館やうくわんが一棟ひとむね、軒のきへぶつつけがきの川の字かが大小おほく見みえた。

夜よるは川の字かに並じんだその屋號やがうに、電燈でんとうがきら／＼とかがやくのであらうも知しれない。あからさまにはいはないが、これは私わたしの知しつた米問屋くわいまいどんやである。——おほ（大きく出で

たな。——當今たうこん三等米さんとうまい、一升いつしやうにつき約やく四十三錢よんじふさんせんの値ねを論ろんずるものに、

米問屋まいもんやの知己ちぎがあらう筈はずはない。……この御新姐ごしんぞの、人形にんぎやうちやう町の娘時代むすめじだいを預あづかつた、女學校ぢよがくかうの先生せんせいを通して、ほのかに様子やうすを知しつてゐるので……以前いぜん、私わたしが小こさな作さくの中に、少し家造やづくりだけ借しやく用ようした事ことがある。

御存ごぞんじの通り、佐賀町さがちやう一廓いつくわくは、殆ほとんど軒のきならび問屋もんやといつてもよかつた。構かまへも略ぼつ同おなじやうだと聞きくから、昔むかしをしのぶよすがに、その時分じぶんの家いへのさまを少すこしいはう。いま此このバラツク建だての洋館やうくわんに對たいして——こゝに見取圖みとりづがある。——斷ことわるまでもないが、地續ぢつづ

きだからといつて、吉良邸きらていのでは決してない。米價べいかはその頃ころも高値たかねだつたが、敢て夜討あへち
 を掛ける繪圖面えづめんではないのであるが、町まちに向つて檜の木戸ひのききど、右みぎに忍返しのびがへしの堀へい、向つて
 本磨ほんみがきの千本格子せんほんがうしが奥深く静しづまつて、間の植込あひたうゑこみの緑みどりのなかに石燈籠いしどうろうに影かげが青い。
 くら蔵庫くらぞうは河岸かしに揃つて、荷にの揚下あげおろしは船ふねで直ぐに取引とりひきが濟すむから、店口みせぐちはしもた屋も
 おなじ事こと、煙草盆たばこぼんにほこりも置かぬ。……その玄關げんくわんが六疊ろくてふの、右へり縁えんの庭にはに、
 物のずき物數寄ものずきを見せて六疊ろくてふと十疊じふてふ、次つぎが八疊はちてふ、續つづいて八疊はちてふが川かはへ張出しはりだの欄干下らんかんしたを、
 茶船ちやぶねは浩々かうくと漕こぎ、傳馬船てんまは洋々やうくとして浮うかぶ。中二階ちうにかいの六疊ろくてふを中なかにはさんで、
 梯子段はしごだんが分わかれて二階にかいが二間ふたま、八疊はちてふと十疊じふてふ——ざつとこの間取りまどで、なかんづくその
 中二階ちうにかいの青あをすだれに、紫むらさきの總むらさきのしつとりした岐卓提灯ぎふちやうちんが淺葱あさぎにすくの、湯上りゆあがの浴ゆ
 衣かたがうつる。姿すがたは婀娜あだでもお妾めかけではないから、團扇うちはで小間使こまづかひを指圖さしづするやうな行儀ぎやうぎで
 ない。「少し風過すこぎる事こと」と、自分じぶんでらふそくに灯ひを入れる。この面影おもかげが、ぬれ色の圓ま
 鬚るまげの艶つや、櫛くしの照てりとともに、柳やなぎをすべつて、紫陽花あぢさゐの露つゆとともに、流ながれにしたゝらうといふ
 寸法すんぽふであつたらしい。……
 わたしわたしは町まちのさまを見るために、この木戸きどを通過とほりすぎた事ことがある。前庭まへにはの植込うゑこみには、き
 り島しまがほんのりと咲き残さつて、折をりから人通りひととほもなしに、眞日中まっぴなかの忍返しのびがへしの下したに、金き

魚賣が荷を下して、煙草を吹かして休んでゐた。

「それ、來ましたぜ。」

風鈴屋でも通る事か。——振り返つた洋館をぐわさくとゆするが如く、貨物車が、然も二臺。私をかばはうとした同伴の方が水溜りに踏みこんだ。

「あ、ばしやりとやツつけた。」

萬筋の裾を見て、苦りながら、

「しかし文句はいひますもののね、震災の時は、このくらゐな泥水を、かぶりついて飲みましたよ。」

特に震災の事はいふまい、と約束をしたものの、つい愚痴も出るのである。

このあたり裏道を掛けて、松村、小松、松賀町——松賀を何も、鶴賀と横なまるには及ばないが、町々の名もふさはしい、小揚連中の住居も揃ひ、それ、問屋向の番頭、手代、もうそれ不心得なのが、松村に小松を圍つて、松賀町で淨瑠璃をうならうといふ、藏と藏とは並んだり、中を白鼠、黒鼠の俵を背負つてちよろしくしたのが、皆灰になつたか。御神燈の影一つ、松葉の紋も見當らないで、箱のやうな店

頭に、煙草を賣るのもよぼ〜のおばあさん。

「變りましたなあ。」

「變りましたは尤もだが……この道は行留りぢやあないのかね。」

「案内者がついてゐます。御串戯ばかり。……洲崎の土手へ突き當つたつて、一つ船を押せば上總澤で、長崎、函館へ渡り放題。どんな抜け裏でも汐が通つてゐますから、深川に行留りといふのはありませんや。」

「えらいよ!」

どろ〜とした河岸へ出た。

「仙臺堀だ。」

「だから、それだから、行留りかなぞと外聞の悪い事をいふんです。——そも〜、大川からここへ流れ口が、下之橋で、こゝが即ち油堀……」

「あゝ、然うか。」

「間に中之橋があつて、一つ上に、上之橋を流れるのが仙臺堀川ぢやありませんか。……斷つて置きますが、その川筋に松永橋、相生橋、海邊橋と段々に架つてゐます。……あゝ、家らしい家が皆取拂はれましたから、見通しに仙臺堀も見えさ

うです。すぐ向うに、煙だか、雲だか、灰汁のやうな空にたゞ一ヶ處、樹がこんもりと、青々して見えませう——岩崎公園。大川の方へその出つ端に、お湯屋の煙突が見えませう、何ういたして、あれが、霧もやの深い夜は、人をおびえさせたセメント會社の大煙突だから驚きますな。中洲と、箱崎を向うに見て、隅田川も漫々渺々たる處だから、あなた驚いてはいけません。」

「驚きません。わかつたよ。」

「いや念のために——は、は、は。も一つ上が萬年橋、即ち小名木川、千筋萬筋の鰻が勢揃をしたやうに流れてゐます。あの利根川圖志の中に、……え、え、え——安政二年乙卯十月、江戸には地震の騒ぎありて心静かならず、訪來る人も稀なれば、なか／＼に暇ある心地して云々々と……吾が本所の崩れたる家を後に見て、深川高橋の東海邊大工町なるサイカチといふ處より小名木川に舟うけて……」

「また、地震かい。」

「あ、黙り黙り。——あの高橋を出る汽船は大變な混雑ですとき。——この四年浦安の釣がさかつて、沙魚がわいた、鰈が入つたと、乗出するのが、押合、へし合。朝の一番なんぞは、汽船の屋根まで、眞黒に人で埋まつて、川筋を次第に下ると、

下の大富橋、新高橋には、欄干外から、足を宙に、水の上へぶら下つて待つてゐて、それ、尋常ぢや乗切れないもんですから、そのまんま……そつとでせうと思ひますがね、——それとも下敷は潰れても構はない、どかりとだか何うですか、汽船の屋根へ、頭をまたいで、肩を踏んで落ちて來ますツて。……こ奴が踏みはづして川へはまると、（浦安へ行かう、浦安へ行かう）と鳴きます。」

「串戲ぢやあない。」

「お船藏がつい近くつて、安宅丸の古跡ですからな。いや、然ういへば、遠目鏡を保持した氣で……あれ、ご覽じろ——と、河童の兒が回向院の墓原で惡戲をしてゐます。」

「これ、芥川さんに聞こえるよ。」

私は眞面目にたしなめた。

「口ぢやあ兩國まで飛んだやうだが、向うへ何うして渡るのさ、橋といふものがないぢやあないか。」

「ありません。」

と、きつぱりとしたもので、蝙蝠傘で、踞込んで、

「確たしかにこゝにあつたんですが、町内持ちやうないもちの分ぶんだから、まだ、架かからないでゐるんでせうな。尤もつともかうどろくに埋うまつては、油堀あぶらぼりとはいへませんや、鬢びんつけぼり付堀つけぼりも、黒鬢くろびんつ
けです。」

「塗ぬりたくはありませんかな。」

「私わたしはもう歸かへります。」

と、麥むぎ稈わらをぬいで風かぜを入いれた、頭あたまの禿はげを憤いる。

「いま見棄みすてられて成なるものか、待まちたまへ、あやまるよ。しかしね、仙臺堀せんたいぼりにしろ、こゝにしろ、残のこらず、川かはといふ名ながついてゐるのに、何なにしろひどくなつたね。大分だいぶん以前いぜんには以前いぜんだが……やつぱり今頃いまごろの時候じこうに此この川筋かはすぢをぶらついた事ことがある。八幡はちまん様の裏うらの渡わたし場ばへ出でようと思おもつて、見當けんたうを取違とりちがへて、あちらこちら抜ぬけ裏うらを通とほるうちに、ざんざん降りぶりに降ふつて來きた、ところがね、格子かうしさきへ立たつて、雨宿あまやどりをして、出窓でまどから、紫むらさきぎれのてんじんに聲こゑをかけられようといふ柄がらぢやあなし……」

「勿論もちろん。」

「たゝつたな——裏川岸うらがしの土藏どざうの腰こしにくつつ付ついて、しよんぼりと立たつたつけ。晩方ばんがたぢやあつたが、あたりがもうくとして、向むかう岸ぎしも、ぼつと暗くらい。折をりから一杯いっぱいの上あけしほ汐しほさ。

……近い處に、柳の枝はじやぶくと浸つてゐながら、渡し船は影もない。何も、油堀だつて、そこにづらりと並んだ藏が——中には破壁に草の生えたのも交つて——油藏とも限るまいが、妙に油壺、油瓶でも積んであるやうで、一倍陰氣で、……穴から燈心が出さうな氣がする。手長蝦だか、足長蟲だか、びちやくくと川面ではねたと思ふと、岸へすれくの濁つた中から、尖つた、黒い面をヌイと出した……

……
小さな聲で、

「河、河、河童ですか。」

「はげてる癬に、いやに臆病だね——何、泥龜だつたがね、のさくと岸へ上つて来ると、雨と一所に、どつと足もとが川になつたから、泳ぐ形で獨りでにげたつけ。夢のやうだ。このびんつけに日が當つちやあ船蟲もはへまいよ。——おんなじ川に行當つても大した違ひだ。」

「眞個ですな、いまお話のその邊らしい。……私の友だちは泥龜のお化どころか、紺蛇目傘をさした女郎の幽靈に逢ひました。……おなじく雨の夜で、水だか路だか分らなく成りましたね。手をひかれたさうですが、よく川へ陥らないで、橋へ出て助かりま

したよ。」

「それが、自分だといふのだらう。……幽霊でもいゝ、橋へ連出してくれないか。」

「——娑婆へ引返す事にいたしませうかね。」

もう一度、念入りに川端へ突き當つて、やがて出たのが黒龜橋。——こゝは阪地で自慢する（……四ツ橋を四つわたりけり）の趣があるのであるが、講釋と芝居で、いづれも御存じの閻魔堂橋から、娑婆へ引返すのが三途に迷つた事になつて——面白……いや、面白くない。

が、無事であつた。

——私たちは、蝙蝠傘を、階段に預けて、——如何に梅雨時とはいへ……本來は小舟でぬれても、雨のなゝめな繪に成るべき土地柄に對して、かう番ごと、繻子張を持出したのでは、をかしく蜎蟻傘の術でも使ひさうで眞に氣になる、以下この小道具を節略する。——時に扇子使ひの手を留めて、默拜した、常光院の閻王は、震災後、本山長谷寺からの入座だと承はつた。忿怒の面相、しかし威あつて猛からず、大閻魔と申すより、口をくわつと、唐辛子の利いた關羽に肖てゐる。従つて古色蒼然たる脇立の青鬼赤鬼も、蛇矛、長槍、張飛、趙雲の概のない

事はない。いつか四谷の堂の扉をのぞいて、眞暗な中に閻王の眼の輝くともにも、本所の足洗屋敷を思はせる、天井から奪衣の大婆の組違へた脚と、眞俯向けに睨んだ逆白髪に恐怖をなした、陰惨たる修羅の孤屋に比べると、こゝは却つて、唐土桃園の風が吹く。まして、大王の膝がぐれに、婆は遺手の木乃伊の如くひそんで、あまつさへ脇立の座の正面に、赫耀として觀世晉立たせ給ふ。小兒衆も、娘たちも、心やすく賽してよからう。但し浮氣だつたり、おいたをすると、それは／＼本當に可恐いのである。

小父さんたちは、おとなしいし、第一品行が方正だから……言つた如く無事であつた。……はいゝとして、隣地心行寺の假門にかゝると、電車の行違ふすきを、同伴が、をかしなことをいふ。

「えゝ、一寸懺悔を。……」

「何だい、いま時分。」

「ですが、閻魔様の前では、氣が怯けたものですから。——實は此寺の墓地に、洲崎の女郎が埋まつてるんです。へ、へ、へ。長い突通しの筈で、薄化粧だつた時分の、えゝ、何にもかにも、未の刻の傾きて、——元服をしたんですがね——富川町うまれ

の深川ツ娘だからでもありませんが、年のあるうちから、流れ出して、途に泡沫の
 儚さです。人づてに聞いたばかりですけれども、野に、山に、雨となり、露となり、雪や、
 氷で、もとの水へ返つた果は、妓夫上りと世帯を持つて、土手で、おでん屋をしてゐた
 のが、氣が變になつてなくなつたといひます——上州安中で旅藝者をしてゐた時
 親知らずでもらつた女の子が方便ぢやありませんか、もう妙齡で……抱へぢやああり
 ましたが、仲で藝者をしてゐて、何うにかそれが見送つたんです。……心行寺と確い
 ひましたつけ。おまるりをして下さいなど、何かの時に、不思議にめぐり合つて、その養
 女からいはれたんですが、ついそれなりに不沙汰でゐますうちに、あの震災で……養
 女の方も、まるきし行衛が分りません。いづれ迷つてゐると思ひますとね、閻魔堂で、
 羽目の影がちらりくと青鬼赤鬼のまはりへうつるのが、何ですか、ひよろくと白
 い女が。……」

いやな事をいふ。

「……又地獄の繪といふと、意固地に女が裸體ですから、氣に成りましたよ、ははは。……
 ……電車通りへ突つ立つて、こんなお話をしたんぢあ、あはれも、不氣味も通り越して、
 ……お不動様の縁日にカンカンカンカン——と小屋掛で鉦をたたくのも同然ですが

ね。」

お参りをするやうに、私がいふと、

「何だか陰氣に成りました。こんな時、むかし一つ夜具を被つた女の墓へ行くと、かぜを引きさうに思ひますから。」

ぞつとする、といふのである。なぜか、私も濕つぽく歩行き出した。

「その癖をかしいぢやありませんか。名所圖繪など見ます度に、妙にあの寺が氣に成りますから、知つてゐますが、寶物に（文幅茶釜）——一名（泣き茶釜）——ありは何うです。」

といつて、涙だか汗だか、帽子を取つて顔をふいた。頭の皿がはげてゐる。……思はず私が顔を見ると、同伴も苦笑ひをしたのである。

「あ、あぶない。」

笑事ではない。——工事中土瓦のもり上つた海邊橋を、小山の如く乗り來る電車は、なだれを急に、胸腹を欄干に、殆ど横倒しに傾いて、橋詰の右に立つた私たちの横面をはね飛ばしさうに、ぐわんと行く時、運轉臺上の人の體も傾く濡の如く黒く曲つた。

ふたり 二人は同時に、川岸へドンと怪し飛んだ。曲角に（危険につき注意）と札が建つてゐる。

「こつちが間抜けなんです。——番ごとこれぢや案内者申し譯がありません。」

片側のまばら垣、一重に、ごしやくくと立亂れ、或は缺け、或は傾き、或は崩れた

石塔の、横鬢と思ふ處へ、胡粉で白く、さま／＼な符號がつけてある。卵塔場の

移轉の準備らしい。……同伴のなじみの墓も、參つて見れば、雑とこの體であらうと思

ふと、生々と白い三角を額につけて、鼠色の雲の影に、もうろうと立つてゐさう

でならぬ。

——時間の都合で、今日はこちらへは御不沙汰らしい。が、この川を向うへ渡つて、大な材木堀を一つ越せば、淨心寺——靈巖寺の巨剎名山がある。いまは東に岩崎公園の森のほかに、樹の影もないが、西は兩寺の下寺つゞきに、凡そ墓ばかりの野である。その夥多しい石塔を、一つ一つうなづく石の如く従へて、のほり、のほりと、巨佛、濡佛が錫杖に肩をもたせ、蓮の笠にうつ向き、圓光に仰いで、尾花の中に、鶏頭の上に、はた袈裟に蔦かづらを掛けて、鉢に月影の粥を受け、

掌に霧を結んで、寂然として起ち、また跏趺坐なされた。

櫻、山吹、寺内の蓮の華の頃も知らない。そこで蛙を聞き、時鳥を待つ度胸もない。暗夜は可恐く、月夜は物すごい。……知つてゐるのは、秋また冬のはじめだが、二度三度、私の通つた數よりも、さつとむら雨の數多く、雲は人よりも繁く往來した。尾花は斜に戦ぎ、木の葉はかさなつて落ちた。その尾花、嫁菜、水引草、雁來紅をそのまゝ、一結びして、處々にその木の葉を屋根に葺いた店小屋に、翁も、媪も、ふと見れば若い娘も、あちこちに線香を賣つてゐた。狐の豆腐屋、狸の酒屋、獺の鬮賣も、薄日にその中を通つたのである。

……思へばそれも可懐しい……

見てすぎつ。いまの墓地の様子で考へると、ぬれ佛の彌陀、地藏菩薩が、大きな笠に胡粉で同行二人とかいて、足のない蟹の如く、おびたゞしい石塔をいぎなひつゝ、あの靈巖寺の、三途離苦生安養——一切衆生成正覺——大釣鐘を、灯さぬ提灯の道しるべに、そことも分かず、さまよはせ給ふのであらうも存せぬ。

「やあ、極樂。おいらんは成佛しました。」

だしぬけに。……

「納屋に立掛けた、四分板をご覽下さい、極……」といひ掛けて、

「何だ、極選か——松割だ。……變な事を考へてゐたものですからうつかり見違へました。先達またへこみ。……」

次々に——特選、精選、改良、別改、また稀……がある。

「こんな婦なら、きみはさぞ喜ぶだらう。」

さもあらばあれ、極樂の蓮の香よりの美しい、松檜の香のぷんとする河岸の木小屋に氣丈夫に成つた、と思ふと、つい目の前の、軒先に、眞つかな旗がさつとなびく。

わたし
私はぎよつとした。

「は、は、櫂の大又を見せて、船の梶に成る事、檜の大割を見せて、蒲鉾屋のまな板はこれで出来ますなど、御傳授を申しても一向感心をなさらなかつたが、如何です、この旗に對して説明がなかつた日には、海邊橋まで逃げ出すでせう。」

案内者は大得意で、

「さ、さ、私について、構はず、ずつとお進み下さい。赤い旗には、白抜きで荷役中としてあります——何と御見物、河岸から材木の上下ろしをする長ものを運ぶんですか

ら往來のものに注意をします。——出ました、それ、彼處へ、それ、向うへ——」

うしろへも。……五流六流、ひらくと翻ると、河岸に、ひしくとつけた船か

ら、印絆纏の威勢の好いのが、割板丸角なんぞ引かっいで、づしく段々を渡

つて通る。……時間だと見え、揃つて揚荷で、それが歩板を踏み越すにつれ、おもみ

を刎ね返して——川筋を横にずつと見通しの船はたは、汐の寄るが如く、ゆらくと皆

ゆれた。……深川の水は、はじめて動いた。……人が波を立てたやうに。——

「は、成程、は。」

案内者は惜し氣もなく頭のはげを見せて、交番でおじぎをしてゐる。叱られたので

はない。——橋を向うへ渡らずに、冬木の道を聞いたのであつた。

「おなじやうでも、冬木だから尋ねようございますよ。これが、洲崎の辨天様だどちよ

つと聞き悪い……てつた勘定で。……お職掌がら、至極眞面目ですからな。」

振り返ると、交番の前から、肩を張つて、まつ直ぐに指さしをして下すつた。細い曲

り角に迷つたのである。橋から後戻りをした私たちは、それから二度まで道を聞いた。

この横を——まつすぐにと、教はつて入つた徑は、露地とも、廂合ともつかず、横

縦畝り込みになつて、二人並んでは幅つたい。しかも搜り足をするほど、草が伸びて、

小さな夏野の趣がある。——棄り放しの空地かと思へば、竹の木戸があつたり、江一格子が見えたり、半開きの明窓が葉末をのぞいて、小さな姿見に葱が映る。——彼處に朝顔の簪さした結綿の緋鹿子が、などと贅澤をいつては不可ない。居れば、誰が通さう?……妙に、一つ家の構へうちを抜き足で行く氣がした。しをらしいのは、あちこちに、月見草のはらくくと、露が風を待つ姿であつた。

こゝを通抜けつゝ見た一軒の低い屋根は、一叢高く茂つた月見草に蔽はれたが、やゝ遠ざかつて振り返ると、その一叢の葉の雲で、薄黄色な圓い月を抱くやうに見えた。

露が、ぼつとして、折から何となく雲低く、徑も一段窪んで——四五十坪、——はじめて見た——蘆が青々と亂れて生えて、徑はその端を縫つてある。雨のなごりか、棄て水か、蘆の根はびしよびしよと濡れて動いて、野茨の花が白く亂れたやうである。時しも、一通り、大粒なのが降つて來た。蘆を打つて、ぱらりと音立てて。

「ありがたい、かきつばたも、あやめもこゝには咲きます。何、根も葉もなくつても——輪ぐらゐきつと咲きます。案内者みやうがに、私が咲かせないでは置きません。露草の青いのも露つぼくこゝに咲きます。嫁菜の秋日和も見られますよ。——それに、何

です。ね……意氣だか、結構だか、何しろ別荘、寮のあとで、これは庭の池らしいごぎ
 います。ね。あの、蘆の根の處に、古笠のつづれたやうな青苔の生えた……あれは石
 燈籠なんです。よ。」

よく見ると、菜屑も亂れた。成程燈籠の笠らしいのが、忽ち、三ツ四ツに裂けて蝦
 蟷に成つたか、と動き出したのは、蘆を分けて、ばさくと、二三羽、鶏の潜りながら啄
 むのである。鮒や、泥鰌の生残つたのではない、蚯蚓……と思ふにも、何となく棄て
 難い風情であつた。

しばらく視めたが、牡鶏がパツと翼を拂いて、雨脚がやゝ繁く成つたから、歩行
 出すと、蘆の根を次第高に、葉がぐれに、平屋のすぐ小座敷らしい丸窓がある。路が
 畝つて、すぐの其縁外をちか／＼と通ると、青簾が二枚……捲いたのでなかつ
 た、軒から半垂れた其の細いぬれ縁に、なよ／＼として、きり／＼としまつた浴衣のすそが
 見えた。白地に、藍の琴柱霞がちら／＼とする間もなく、不意に衝と出た私たちから隠
 れるやうに、朱鷺の伊達巻ですつと立つ時、はらりと捌いた棲淺く、柘榴の花か、と思ふ
 のが散つて、素足が夕顔のやうに消えた。同時に、黒い淡い影が、すだれ越にさつと映
 した、黒髪が長く流れたのである。

洗髪あらひがみを干かしてなどゐたらしい。……そのすだれを漏れたのは、縁えんに坐つたのか、腰こしを掛けたのか、心づく暇ひまもなかつた。

「……ざくろの花はな、そ、そんな。あの、ちら〜と褌つまに紅あかかつたのは螢ほたるの首くびです。又またぼつと青あをく光ひかるやうに肌はだに透すき通とほつたではありませんか。……螢ほたるを染ほたるめた友染いうぜんですよ。もうあのくらゐ色いろが白しろいと、影かげばかり、螢ほたるの羽はねの黒くろいのなんざ、目めが眩くらんで見えやしません。すごい、何どうもすごい。……特選とくせん、精選せいせん、別改べつかい、改良かいりやう、まれなり背負しよつて立たて。極選ごくせん、極樂ごくらく、有難ありがたい。いや魔界まかいです、すごい。」

といふ、案内者あんないしやの横面よこつらへ、出崎でさきの巖いはをきざんだやうな、徑みちへ出張でばつた石段いしだんから、馬うまの顔かほがヌツと出でた、大おほきな洋犬かめだ。長啄ちやうたく能獵よくれふす——パン〜と厚皮あつかはな鼻はなが、鼻はなへぶつかつたから、

「ワツ。」

といつた。——石垣いしがきから隣うはばみが出でたと思おもつたさうである。

犬嫌いぬきらひな事ことに掛かけては、殆ど病びやうてき的ひとで、一つはそれがために連立つれだつてもらつた、浪ら人うじんの劍客けんかくがその狼狽うろうたへかただから、膽きもを冷ひやしてにげた。

またゐた——再び吃驚びつくりしたのは三角さんかくをさかさな顔かほが、正しやうめん面に蟠踞はんきよしたのであ

る。こま狗の焼けたのらしい。が、角の折れた牛、鼻の碎けた猪、はたスフィックスの如き異形な石が、他に壘々としてうづたかい。

早く本堂わきの裏門で、つくろつた石の段々の上の白い丘は、堀を三方に取した冬木の辨財天の境内であつた。

「お顔を、ご覽に成りますか。」

「いや何ういたして。……」

「こゝで拜をして參ります。」

と、同伴もいつた。

手はよく淨めたけれども、刃を上げて、よぢれた裾は、これしかしながら天女に面すべき風體ではない。それに、蟬燭を取次いだのが、堂を守る人だと、ほかに言があつたらう。居合はせたのは、近所から一寸留守番に頼まれたといつた前垂れ掛の年配者で、「お顔を。」——これには遠慮すべきが當然の事と今も思ふ。況して、バラツクの假住居の縁に、端近だつた婦人さへ、山の手から蘆を分けた不意の侵入者に、顔を見せなかつた即時であつた。

潮時しほときと思はれる。池いけの水はやゝ増ましたやうだが、まだ材木ざいもくを波立なみだたせるほどではな
い。場所ばしよによると、町まちが野のになつた處ところもあるのに、覺おぼえて一面いちめんに蘆あしが茂しげつた池いけの縁へりは、
右みぎ手にその蘆あしの丈たけばかりの小家こやが十とウばかり敷かを並ならべて、蘆あしで組くんだ簾すだれも疎まぼらに、揃そろつて野の
草ぐさも生はえぬ露むぎだし出せどの背戸せどである。しかし、どの家うちも、どの家うちも、裏手うらて、水口みづぐち、勝手元かつてもと、
皆みな草花くさばなのたしなみがある、好このみの盆ぼん裁さいも置おき交ませて。……失禮しつれいながら、缺摺鉢かけすりばちの
松葉牡丹まつばぼたん、蜜柑箱みかんぼこのコスモスもありさうだが、やがて夏なつも半なかば、秋あきをかけて、手桶てをけたらひ、盥ひ、
俎まな、柄杓ひしやくの柄えにも朝顔あさがほの蔓つるなど掛かけて、家々いえいえの後うしろ姿すがたは、花野はなのの帯おびを白露しろつゆに織お
るであらう。

色いろなき家いえにも、草花くさばなの姿すがたは、ひとつく女をんなである。軒のきごとに、妍かほよむすめき娘むすめがありさうで、
皆みな優やさしい。

横よこのこの家やならびを正しやうめん面めんに、鍵かぎの手てになつた、工場こうちやうらしい棟ひとむねがある。――
その細ほそい切きれめに、小ちひさな木きの橋はしを渡わたしたやうに見みて取とつたのは、折をりから小こ雨さめして、四邊あたり
に靄もやの掛かつたため、同つれ伴ちやういの注ま意いを待まつてもない。ずつと見み通とほしの、油あぶら堀ぼりから入いりぼ
堀りの水みづに、横よこに渡わたした小橋こばしで、それと丁字形ちやうじがたに、眞向まむかうへ、雨あめを柳やなぎの絲いと状じやうに受うけて、
縦たてに弓形ゆみなりに反そつたのは、即すなはち、もとの渡船場わたしばに替かへた、八幡宮はちまんぐう、不動堂ふどうだうへ參まゐる橋はしで

あつた。

「あなたが、泥龜すつぽんに遁にげたのは——然さうすると、あの邊へんですな。」

「さあ、あの渡船場わたしに迷まよつたのだから、よくは分わからないが、彼の邊へんだらうね。何なにしろ、もつと家藏いへくらが立たて込んで居ゐたんだよ。」

「從したがつても變へんですが、……友ともだちが、女郎ぢよらうの幽靈いうれいに手てを曳ひかれたのは、工場こうばの向むかひ裏らあたりなに成なるかも知しれません。——然さう言いへば、いま見みた、……特選とくせん、稀まれも、ふつと消きえたやうで、何なんだか怪あやしいうございますよ。」

「御堂前おだうまへで、何なにをいふんだ。」

「こりや何どうも……景色けしきに見惚みとれて、また鳥居とりゐぎ際に立たつてゐました。——あゝ八幡様はちまんさまの大銀杏おほいてふが、遠見とほみの橋はしのむかうに、對つひに青々あをくとして手てに取とるやうです。涼すずしさうにしとくと濡ぬれてゐます。……震しんさい災さいに焼やけたんですが、神田かんだの明神みやうじん様さまのでも、何所どこのでも、銀杏いしふは偉えらうございますな。しかし苦勞くろうをしましたね、彼所あそこへ行いつたら、敬意けいを表へうして挨拶あいさつをしませうよ。石碑せきひがないと、くツつけて夫婦いっしよにして見みたいんですが、あの眞ま中の横綱よこづなが邪魔じやまですな。」

「馬鹿ばかな事ことを——相撲すまふ鼻び貞いが聞きくと撲なぐるからおよし。おや、馬うまが通とほる。……」

橋の上を、ぬほりとして大きな馬が、大八車を曳きながら。——遠くで且音がしな
いから、橋を行くのが一本の角木に乗つて、宛如、空を乗るやうである。

ハツと思ふほど、馬の腹とすれ／＼に、鞍から這つた娘が一人。……白地の浴衣に、友
禪の帯で、島田らしいのが、傘もさゝず、ひらりと顯はれると、馬は隠れた、——何、
池のへりの何の家か、その裏口から出たのが、丁度、遠くで馬が橋を踏むトタンに、
その姿を重ねたのである。

雨を面白さうに、中の暗い工場の裏手の廂下を、池について、白地をひらくと
蝶の袖で傳つて行く。……その風情に和らげられて、工場隅に、眞赤に燃ゆる火が、
凌霄花の影を水に投げた。

娘がうしろ向きになつて、やがて、工場について曲る岸から——その奥にも堀が續いた
——高瀬船の古いのが、斜に正面を切つて、舳を蝦蟆の如く、ゆらくと漕ぎ來り、
半ば池の隅へ顯はれると、後姿のまゝで、ポンと飛んで、娘は蓮葉に、軽く船の上へ。
そして、艀を押す船頭を見て振り向いた。父さんに甘えたか、小父さんを迎へたか、兄
哥にからかつたか、それは知らない。振り向いて、うつくしく水の上で莞爾した唇は、雲
に薄暗い池の中に、常夏が一輪咲いたのである。

永喜橋——町内持ちの、いましがたの小橋と、渡船場に架けた橋と、丁字形になる處に、しばらくして私たちは又たゞずんで、冬木の池の方を振り返つたが、こちらからはよくは見通せない。高瀬の蝦蟆の背に娘の飛び乗つたあたりは、蘆のない、たゞ稗時ひえまきの盤はちである。

いふまでもなく、辨財天の境内から、こゝへ来るには、一町、てかくとした床屋にまじつて、八百屋、荒物の店が賑ひ、二階造りに長唄の三味線の聞える中を通つた。が急に一面の焼野原が左に開けて、永代あたりまで打通しかと思はれた處がある。電柱とラヂオの竹が、矢來の如く、きらりと野末を仕切るのみ。「茫漠たるものすな。」案内者にもどこだか舊の見當がつかぬ。いづれか大工場の跡だらうで通つて來たが、何、不思議はない、嘗て満々と鱗浪を湛へた養魚場で、業火は水を焼き、魚を煙にしたのである。原の波間を出つ入りつ。渚に飛々苦屋の状磯家淺間な垣廂の、新しい佛壇の覗かれるものあり、古蚊帳を釣放したのに毛脛が透けば、水口を蔽ひ果てぬ管簾の下に、柄杓取る手の白さも露呈だつたが、まばら垣あれば、小窓あれば、縁が見えれば……また然なければ、板切に柵を組み、葎簣を立てて、いひ合はせたやうに朝顔の蔓を這はせ、あづま菊、おしろいの花、おいらん

草、薄刈萱はありのまゝに、桔梗も萩も植ゑてゐて、中には、大きな焼木杭の空虚を苔蒸す丸木船の如く、また貝殻なりに水を汲んで、水草の花白く、ちよろちよろと噴水を仕掛けて、思はず行人の足を留めるのがあつた。

御堂の裏、また鳥居前から、ずつと、悠うまで、草花に氣の揃つた處は、他に一寸見當らない。天女の袖の影が日にも月にも映つて、優しい露がしたゝるのであらう。——いま、改めて遙拜した。——家毎に親しみの意を表しつゝ、更に思へば、むかしの泥龜の化異よりも、船に飛んだ娘の姿が、もう夢のやうに思はれる。……池のかくれたのにつけても。

なんど、もの／＼しく言ふほどの事はない。私は、水畔の左、棲が、屋根船へ這込むのが見苦しいの、頭から潜るのが無意氣だのと——落ちさへしなければ可い——そんな事を論ずる江戸がりでは斷じてない。が、おはぐる蜻蛉が滯へ止つたと同じ様に、冬木の娘の早術を軽々に見過されるのが聊かも足りない。漕ぎつゝある船には、岸から手を掛けるのさへ、實は一種の冒険である。

いま、兵庫岡本の谷崎潤一郎さんが、横濱から通つて、某活動寫眞

の世話せわをされた事ことがある。場所ばしょを深川ふかがはに選えらんだのに誘さそはれて、其その女優ぢよいう……否いや、撮さつえ
 影いを見みに出掛でかけた。年としの暮くれで、北風きたかぜの寒さむい日ひだった。八幡はちまん様の門前もんぜんの一寸ちよつとした
 カフエーで落合おちあつて……いまでも覺おぼえてゐる、谷崎たにざきさんは、かきのフライを、おかはり
 つき、俗ぞくにこみで誂あつらへた。私は腹はらを痛いためて居ゐた。何なに、名物めいぶつの馬鹿貝ばかがひはまぐり、鍋なべで退治たいぢ
 て、相拮抗あひきつつかうする勇氣ゆうきはあつたが、西洋料理せいやうれうりの獻立こんだてに、そんなものは見當みあたらない。…
 ……壘びんごと熱爛あつかんで引掛ひつかけて、時間じかんが來きたから、のこり約やく一合半いちがふはんを外套ぐわいたうの衣兜ポケツトに
 忍しのばせた。洋杖ステツキを小脇こわきに、オーバーえり、大島川筋おほしまがはすぢの蓬萊橋ほうらいばしにかゝると、汐時しほときを見計みはからつた
 へ——越中島ゑつちうじまを畝うねつて流ながるゝ大島川筋おほしまがはすぢの蓬萊橋ほうらいばしにかゝると、汐時しほときを見計みはからつた
 のだから、水みづは七分來ななぶんきた。渡わたつた橋はしづめ詰じに、寫真しやしんの一行いつかうの船ふねが三艘さんぞう、石垣いしがきについ
 てゐる。久しぶりだったから、私は川筋かはすぢを兩方りやうほうにながめて、——あゝ、おもひ起おこす、
 さばけた風葉ふうえふ、おとなしい春葉しゆんえふなどが、血氣けつきさかんに、霜しもを浴あび、こがらしを衝つい
 て、夜よふけては蘆あしの小窓こまどにも思おもふ女なに、月影つきかげすごく見送みおくられ、朝歸あさかへり遅おそうしては、
 苦とまで蟹かにを食くふ阿媽おつかあになぶられながら、川口かはぐちまでを幾いくかへり、小船こぶねで漕こがしたものだつ
 け。彼處あそこに、平清ひらせいの裏うらの松まつが見みえる。……一畝ひとうねりした處ところが橋はしづめ詰じの加賀家かがやだらう。…
 ……やがて渺々べうくたる蘆原あしはらの土手どてになる。……

船ふねで手てを擧あげたのに心こゝろ著ついた。——谷崎たにざきさんはもう乗のつてゐた。なぞへに下おりて石い垣しがきへ立たつと、私わたしの丈たけぐらゐな下したに、船ふねの小こべりが横よこづけになつて、中流ちゅうりゅうの方に二艘にそう、谷崎たにざきさんはその眞中まんなかに寒風かんふうに吹ふかれながら颯爽さつさうとして立たつてゐた。申し譯まをわけをするのではない、私わたしは敢あへて友ともだちを差置さしおいて女優ぢやうゆうの乗のつたのを選えらびはしないが、判官飛はうぐわんとびなぞ思おもひも寄よらぬ事こと、その近ちかいのに乗のらうとすると、些ちと足あしがとゞき兼ねかねる。……「おつかまんなせえ。」赤あから顔がほの船頭せんとうが逞たくましい肩かたをむずと突つきだ出だしてくれただから、ほども様子やうすも心得こゝろえずに、いきなり抱だきつつた。が船ふねが搖ゆれたから、肩かたを辻すべつた手てが、頸筋くびすぢを抱だいて、もろに、どさりと乗のしかつた。何なんと何どうも、柱はしらへ枕まくらを打うちつけて、男をとこ同どう士し嚙しかじりついたり形かたちだから、私わたしだつて馴なれない事ことだし、先せん方も驚おどろいた、その上うへに不意ふいの重量おもみで船頭せんとうどのが胴どうの間まへどんと尻餅しりもちをついて一ひとしほ汐浴あびて「此この野郎やろう！」尤もつともだ、此この野郎やろうは更あらためていふに及およばず、大島川おほしまがはへざんぶ、といふと運命うんめいにかゝはる、土手どてをひたくとなめる浅瀬あさせの泥どろへ、二人ふたりでばしやりと寝ねた。

「それから思おもふと……いまの娘むすめさんの飛乗とびのりは、人間業にんげんわざぢやあないんだよ。」
 「些ちと大袈裟おほげさですなあ、何なに、あれ式しきの事ことを。……これから先さき、その蓬萊町ほうらいちやう、平野町ひらのちやう

の河岸へ行つて、船の棟割といった處をご覽なさい。阿媽が小舷から蟹ぢやありませんが、釜を出して、斜かひに米を磨いでるわきを、あの位な娘が、袖なしの肌襦袢から、むつちりとした乳をのぞかせて、……それでも女氣でござんせうな、紅入模様のめりんすを長めに腰へ巻いたなりで、その泥船、埃船を棹で突ツ張つてゐますから。

— 氣の毒な事は、汗ぐつしよりですがね、勞働で肌がしまつて、手足のすらりとしてゐる處は、女郎花に一雨かゝつた形ですよ。—

「雨は、お詔にしとくと降つてゐるし、眞個にそれが、凡夫の目に見えるのかね。」

「ご串談ばかり、凡夫だから見えるんでさあね。——いえまだ、もつと凡夫なのは、近頃島が湧いた様に開けました、疝氣稻荷様近くの或工場へ用があつて、私の知り合が三人連れ圓タクで乗込んだのが、歸りがけに、洲崎橋の正面見當へ打突ると、……凡夫ですな。まだ、あなた、四時だといふのに、一寸見物だけで、道普請や、小屋掛でござつた返して、こんがらかつてゐる中を、ブン／＼獨樂のやうにぐる／＼りで、その癖乗込む……疾いんです。引手茶屋か、見番か、左は？……右は、といふうちに、

— 豫め御案内申しましたつけ、仲の町正面の波除へ突き當つたと思召せ。—

— たちま蒼海漫々たり。あれが房州鋸山だ、と指さすのが、府下品川だつたり

何かして、地理には全く暗い連中ですが、蒸風呂から飛上つた同然に、それは涼しいには涼しいんですとさ。……偏に風を賞めるばかり、凡夫ですな。巻煙草をふかす外に所在がないから、やゝあつて下に待たした圓タクへ下りて來ると、素裸の女郎が三人——この友だち意地が悪くつて、西だか東だか方角は教へませんがね、虚空へ魔が現れた様に、簾を拂つた裏二階の窓際へ立並ぶと、腕も肩も、胸も腹も、くなくと緋の切を巻いた、乳房の眉間尺といった形で揉み合つて、まだそれだけなら、何女郎だつて涼みます、不思議はありませんがね。招いたり、頬邊をたいて見せたり、肱でまいたり、これがまさしく、府下と房州を見違へた凡夫の目にもありくと見えたんですつて。再び説く、天の一方に當つて、遙にですな。惜しいかな、方角が分りません。」

「宙に迷つてる形だね、きみが手をひかれた幽霊なぞも、或はその連中ではないのかね。」

「わあ、泥龜が、泥龜が。」

「あ、凡夫を驚かしては不可い。……何だか、陰々として來た。——丁ど此處だ、此處だが、しかし、油倉だと思ふ處は、機械びきの工場となつた。冬木で見た、あの工場

も、これと同じものらしい。」

つい、叱られたらあやまる氣で、伸上つて窓から覗いた。中で竹刀を使つてゐるのだと、立處に引込まれて、同伴が犬に怯えたかほりに、眞庭念流の腕前を顯はさうといふ處である。

久しぶりで參詣をするのに、裏門からでは、何故か不躰な氣がする。木場を一りするとして、話しながら歩行き出した。

「……蠱といふ形を、そのまゝ女の肉身で顯はしたやうな、いまの話で思出すが、きみの方が友だちだから此方も友だちさ。以前——場所も同じ様だが、何とかいふ女郎がね。一寸、その服裝を聞いて覺えてゐる。……黒の紹縮緬の裾に、不知火のちら／＼と燃えるのに……水淺葱の麻の葉の襟の掛つた襦袢だとき。肉色縮緬の長襦袢で、其の白襦子の伊達巻を——そんなに傍へ寄つちや不可ない。橋の眞中を通るのに、邪魔になるぢやあないか。」

下を二一流し箒が二る。

「何だつけ、その襦袢を屏風へ掛けて、白い切の潰島田なのが……いや、大丈夫——惜しいかな、これが心中をしたのでも、殺されたのでも、斬られたのでもない。のり血

更になしだよ。(まだ學生さんでせう、當樓の内證は穩かだから、臺のかはりに、お辨當を持つて入らつしやい。……私に客人があつて、退屈だつたら、晝間、その間裏の土手へ出て釣をしておいでなさいまし。……海津がかゝります。私だつて釣つたから。……) 時候は暑いが、春風が吹いてゐる。人ごとだけれども、眉間尺と較べると嘘のやうだ。」

「風葉さん、春葉さん、い、いづれですか、言はれた、その御當人は？」

「それは、想像にまかせよう。」

案内者にも分らない。

水の町の不思議な大森林は、皆薄赤く切開かれた、木場は林を疊んで堀に積み、空地に立掛けた板に過ぎぬ。蘆間に鷺の眠り、軒に蛙の鳴いたやうな景色は、また夢のやうである。

——鶴歩橋を見た。その橋を長く渡つた。名の由来を知りたい方々は、案内記の類を讀まるゝがよい。私はそれだからといつて、鶴歩といふ字にかゝらふわけではないが、以前知つた時、この橋は鶴の首に似て、淡々たる水の上に、薄雲の月更けて、頸を皓く眠つてゐた。——九月の末、十月か、あれは幾日頃であつたらう。折か

ら此の水邊の惠比壽の宮の町祭りの夜と思ふ。もう晩かつたから、材木の森に餌す
 る鰐口の響きもなく、露地の奥から笛の音も聞えず、社頭にたゞ一つ紅の大提灯
 の霧に沈んで消残つたのが、……強ひて擬へるのではない、さながら一抹の丹頂
 に似て、四邊皆水。且行き、且、彳亍人影は、斑に黒い羽の影を落して、橋をめぐつた
 堀は、大なる兩の翼だつたのを覚えてゐる。その時、颯と吹いた夜嵐に、提灯は暗
 くなり、小波は白い毛を立てて、空なる鱗形の雲とともに亂れた。

鶴の姿の消えたあととは、遣手の欠伸よりも殺風景である。

しかし思へ。鹿島へ詣でた鳳凰も、夜がなければ風説である。——鶴歩橋の面影
 も、別に再び月の夜に眺めたい。

こゝに軒あれば、松があり、庭あれば燈籠が差のぞかれ、一寸櫺子のすき間さへ、
 山の手の雀の如く鳥影のさすと見るのが、皆ひらくと船であつた。奥深い戸毎の帳
 場格子も、早く事務所の椅子になつた。

けれども、麥稈が通りがかりに、

「あゝ、焼け残つた……」

私は凡夫だから、横目にたゞ「おなじ束髪でも涼しやかだな。」ぐらゐなもの、氣に

した處で、ひとへに御婦人ばかりだが、同伴は少々骨董氣があるから、怪しからん。たゞ寄せた椅子の下に突つ込んだ、鐵の大火鉢をのぞき込んで、
 「十萬坪の埧塙の中で、西瓜のわれたやうに焼けても、溶けなかつたんですな。寶物ですぜ。」

この不作法に……叱言もいはぬは、さすがに取り鎮めた商人の大氣であらう。

それにしても、荒れてゐる。野にさらしたものの如く、杭が穴、桁が骨に成つた橋が多い。わづかに左右を残して、真中の渡りの深く崩れ込んだのもある。通るのに危なつかしいから、また踏み迷つた體になつて、一處は泥龜の如く穴を傳ひ、或處では、「手を曳いてたべ……幽靈どの。」

「あら、怨めしや。」

どろくどろと、二人で渡つた。

人通りさへ、稀であるのに、貨物車は、衝いて通り、驅け抜ける。澁苦い顔して乗るのは、以前は小意氣な小揚たちだつたと聞く。

たゞひとり、この間に、角乗の競勢を見た。岸に柳はないけれども、一人ずつと乗つた大角材の六間餘は、引緊つた眉の下に、その行くや葉の如し。水面を操ること、

草履を突つ掛けたよりも軽うして、横にめぐり、縦に通つて、漂々として浮いて行く。
 月夜に鶴歩橋を渡るなど、いひ出たのも極りが悪い。かの宋の康王の舍人にして、
 狷彭の術を行ひ、冀州、涿郡の間に浮遊すること二百年。しかして其の涿水を鯉
 に乗つた琴高を羨むには當らない。わが深川の兄哥の角乗は、仙人を凌駕する
 こと、竹の柄の鳶口約十尺と、加ふるに、さらし六尺である。
 道幅もや、傾くばかり、山の手の二人が、さいはひ長棹によらずして、たゞ突き出
 された川筋は、むかしにくらべると、(大)といひたい、鐵橋と註し、電車が複
 線といひたしたい。大汐見橋を、八幡宮から向つて左へ、だら〜と下りた一廓
 であつた。

また貨物車を曳出すでもないが、車輪、磴音の響き渡る汐見橋から、ものの半
 町、此處に入ると、今は壊れた工場のとを、石、葉鐵を踏いで通る状ながら、
 以前は、芭蕉で圍つたやうな、しつとりした水の色に包まれつゝ、印絆纏で木を挽く
 仙人が、彼方に一人、此方に二人、大なる材木に、恰も啄木鳥の如くにとまつて、鋸
 の嘴を閑に敲いてゐたもので、ごしごし、ごしごし、時に鋸を入れて、カンと行る。湖心
 に櫓の音を聞くばかり、心耳自から清んだ、と思ふ。が、同伴の説は然うでない。この汐

見橋を、廓へ出入るために架けた水郷の大門口ぐらゐな心得だから、一段低く、此處へ下りるのは、妓屋の裏階子を下りて、間夫の忍ぶ隠れ場所のやうな氣がしたさうである。

夜更けて、引け過ぎに歸る時も、酔つて、乗込む時も。

大川此方の町の、場所により、築地、日本橋の方からも永代を渡るが、兩國

橋、もう新大橋となると、富岡門前の大通りによらず、裏道、横町を拾

つて、入堀の河岸を縫ふ。……晝も靜かだ。夜の寂しき。汀の蘆は夏も冷い。葉うらに

透る月影の銀色は、やがて、その蘆の細莖の霜となり、根は白骨と成つて折れ

る。……結んで角組める鬘は、解けて洗髪となり、亂れて抜け毛となり、既にして穂

とともに塵に消えるのである。

それが枯れ立ち、倒れ伏す、河岸、入江に、わけて寒月の光り冴えて、剃刀の刃の

如くこぼるゝ時、大空は遙に蘆葦雑草の八萬坪を透過つて、洲崎の海、永代浦か

ら、蒼波品川に連つて、皎々として凍る時よ。霜に鳴く蟲の黒い影が、世を怨む女の

瞳の如く、蘆の折葉の節々は、卒堵婆に、浮ばない戒名を刺青したか、と明る

く映る。……そのおもひ、骨髓に徹つて、齒の根震ひ、肉戦いて、酔覺の頬を悚然と

氷こほりわで割わらるゝが如ごとく感かんじた……と言いふのである。

御勝手ごかつてになさい。

此この案内あんないには弱よわつた。——(第一だいいち、こゝを記しるす時とき、七月二十二日しちぐわつにじふにちの暑あつさと言いつたら。夜よるへかけて九十六度くじふろくど、四十年來しじふねんらいのレコードだといふ氣象臺きしやうだいの發表はつべうであるから、借家しやくやは百ひやく度を超こえたらしい。)

早はやく汐見橋しほみばしへ驅かけ上あがらう。

來くるわ、來くるわ。

船ふね。

筏いかだ。

見渡みわたす、平久橋へいきうばし。時雨橋しぐればし。二筋ふたすぢ、三筋みすぢ、流れを合あせて、濤々たうたうたる水面すゐめんを、幾いく流なが、左右さいうから寄せ合あうて、五十傳馬船ごじふでんま、百傳馬船ひやくでんま、達磨だるま、高瀬たかせ、埃船ごみぶね、泥ど船ふね、釣船つりぶねも遠とほく浮うく。就な中なか、筏いかだは馳はしる。水みづは瀬せを造つくつて、水脚みづあしを千筋ちすぢの綱つなに、さら〜と音おとするばかり、裝入もりいるゝ如ごとく川筋かはすぢを上のぼるのである。さし上のぼる汐しほは潔いさぎよい。

風かぜはひよう〜と袂たもとを吹ふいた。

私わたしは學がく者しやでないから、此この汐しほは、堀割ほりわりを、上かみへ、凡およそ、どのあたりまで淨じやうくわ化くわす

るかを知らぬ。

けれども、驚破洪水と言へば、深川中、波立つ湖となること、傳へて一再に留まらぬ。高低と汐の勢ひで、あの油堀、仙臺堀、小名木川、——且辿り、且見た堀は、皆満々と鮮しい水を流すであらう。冬木の池も湛へよう。

誘はれて、常夏も、夕月の雲に濡れるであらう。

「成程、汐見橋は汐見橋ですな。」

同伴が更めて感心した。廓へばかり氣を取られて、あげさげ汐のさしひきを、今はじめて知つたのかと思ふと、また然うでない。

大欄干（此にも大がつく）から、電車の透き間に、北し、東して、涼しくはあるし、汐の流れを眺めるうちに……一人來た、二人來た、見ぬ間に三人、……追羽子の唄に似て、氣の輕さうな女たち、銀杏返しのも、島田なもの、ずつと廂髪なもの、何處からともなく出て來て、おなじやうに欄干に立つて、しばらく川面を見おろしては、ふいと行く。——内證でお知らせ申さうが、海から颯々と吹通すので、朱鷺、浅葱、紅を、斜に絞つて、半身を翻すこと、特に風のために描いた女の蹴出の繪のやうであつた。が、いづれも、涼むために立ち停るのではない。凡そ汐時を見計つて、橋に近づく

船乗、筏師に、目許であひづを通はせる。成程、汐見橋の所以だ、と案内者が言ふのである。眞偽は保證する限りでない。たゞ、涼々として大汐の上る景色は、私……一個人としては、船頭の、下から蹴出を仰ぐ如き比ではなかつた。

順は違ふが、——こゝで一寸話したい。——これは、後に、洲崎の辨財天の鳥居前の、寛政の津浪之碑の前での事である。——打寄する浪に就いて、いま言はう。汐見橋から、海に向つた——大島川の入江の角、もはや平久町何丁めに成つた——出洲の端に同じ津浪の碑が立つて居た。——前談、谷崎さんと活動寫眞の一行が、船で来て、其の岸を見た震災前には、蘆洲の中に、孤影螢然として、百やくねんひとりゆかげの如く、あの、凄く、寂しく、あはれだつた碑が、恰も、のつぽの石年一人行く影の如く、あの、凄く、寂しく、あはれだつた碑が、恰も、のつぽの石白の如く立つて、すぐ傍には、物干棹に洗濯ものが掛つて、象を撫づるのではないが、私たちの石を繞るのを、片側長屋の小窓から、場所らしい、俠な娘だの、洒落れた女房が、袖を引合つて覗いたものであつた。——いまは同じ所、おなじ河岸に、ポキリと犀の角の折れた如く、淵にも成らぬ痕を残して、其の軀は影もない。

焼けた水を、目^ま前^{あたり}、波^{なみ}の鱗^{うろこ}形^{がた}に積^つんだ、煉^{れん}瓦^{がわ}を根^ねにして、卒^そ堵^と婆^ばが一^{いつ}基^{つき}。――
 神力^{しんりき}大^{たい}光^{くわう}普^ふ照^{せう}無^む際^{さい}土^ど消^{しょう}險^{けん}。三^{さん}垢^く冥^{みやう}廣^{くわう}濟^{さい}衆^{しゆう}厄^{やく}難^{なん}。――しか／＼と記^{しる}したのが、
 水^{みづ}へ斜^{ななめ}に立^たつて居^ある。

尤^{もつと}も、案^{あん}内^{ない}者^{しや}といへども、汐^{しほ}見^み橋^{はし}から水^{みづ}の上^{うへ}を飛^とんだのではない。一^{いち}度^ど、富^{とみ}岡^{おか}

門^{げん}前^{ぜん}へ。……それから仲^な通^{つう}を越^{あつち}中^{ちゆう}島^{しま}へ、蓬^{ほう}萊^{らい}橋^{はし}を渡^{わた}ること――其^その谷^{たに}崎^{さき}さん

の時^{とき}と殆^{ほとん}ど同^{おなじ}一^{いつ}に、嘗^{かつ}て川^{かは}へ落^おちた客^{きやく}が、津^つ浪^{なみの}之^の碑^ひを訪^{たづ}ねたので、古^{ふる}石^{いし}場^ば、牡^{ぼた}丹^{たん}町^{ちやう}を

川^{かは}つたひに、途^{とちゆう}中^{ちゆう}、木^きの段^{だん}五^ごつを數^{かず}へる、人^{ひと}のほか車^{くるま}は通^{つう}じない牡^{ぼた}丹^{たん}橋^{はし}を高^{たか}く渡^{わた}つた。

――恚^{いか}う大^{おほ}まはりをししないと、汐^{しほ}見^み橋^{はし}から手^てに取^とるやうでも、碑^ひのあとへは至^{いた}り得^えない

のである。此^このあたり、船^{ふね}の長^{なが}屋^や、水^{みづ}の家^{いへ}、肌^{はだ}襦^{じゆ}袢^{ばん}で乳^{ちち}のむつちりしたのなどは、品^{ひん}か

格^{かく}ある讀^{どく}者^{しや}のお聞^ききなさりたくない事^{こと}を信^{しん}じて、先^{さき}を急^{いそ}ぐ。従^{したが}つて古^{ふる}石^{いし}場^ばの石^{いしが}瓦^{がわ}

、石^{せき}炭^{たん}屑^{くづ}などは論^{ろん}じない。唯^{たびと}一^{いつ}牡^{ぼた}丹^{たん}町^{ちやう}の御^ご町^{ちやう}内^{ない}、もしあらば庄^{なぬし}屋^{じま}に建^{けん}言^{げん}

したい事^{こと}がある。場^{ばしよ}所^{しよ}のいづれを問^とはず、一^{ひと}株^{かぶ}の牡^{ぼた}丹^{たん}を、庭^{には}なり鉢^{はち}なりに植^ちゑて欲^{ほし}い。

紅^{こう}、白^{はく}、緋^ひ、濃^{のう}艶^{えん}、淡^{たん}彩^{さい}、其^その唯^{たゞ}一^{いつ}輪^{りん}の花^{はな}開^{ひら}いて、臺^{うてな}に金^{こん}色^{じき}の町^{ちやう}名^なを刻^きむと

せよ、全^{ぜん}町^{ちやう}立^{たち}處^{ところ}に樂^{らく}園^{えん}に化^{くわ}して、いまは見^みえぬ、團^{だん}子^ご坂^{さか}、入^{いり}谷^やの、菊^{きく}、朝^{あさ}

顔^ほ。萩^{はぎ}寺^{でら}の萩^{はぎ}、を凌^{しの}いで、大^{だい}東^{とう}京^{きやう}の名^{めい}所^{しよ}と成^ならう。凡^{およ}そ、その町^{まち}の顯^{あら}はるゝは、

住む人の富でない。ダイヤモンドの指環でない、時に、一本の花である。

やがて、碑のあとに、供養の塔婆を、爲出す事もなく弔つた。

沈んだか、焼けたか、碑の行方を訪ねようと思ふにさへ、片側のバラツクに、數多

く集つたのは、最早や、女房にも娘にも、深川の人のどころでない。百里帶水、對馬

を隔てた隣國から入稼ぎのお客である。煙草を賣つて、ラムネ、サイダーを酌するら

しい、おなじ鮮女の衣の白きが二人、箒を使ひ、道路に水を打つを見た。塔を清むるは、

僧の善行である。町を掃くのは、土を愛するのである。殊勝のおん事、おん事と、

心ばかり默禮しつゝ、私たちは、むかし蘆間を渡せし船板——鐵の平久橋を渡る。

「震災の時ではありませぬで、ついこの間、大風に折れましてな。」

同伴よ、許せ、赤ら顔で、はげたのが——蘆の根に寄る波の、堤に並ぶ蘆簣の茶屋から、

白雪の富士の見える、こゝの昔を描いた配りものらしい——團扇を使ひながら、洲崎の

辨財天の鳥居外に、石の柵を緩くめぐらした、碑の前に立つた時、ぶらりと來合はせ

て、六十年配が然ういつた。

此處寛政三年波あれの時、家流れ人死するもの少からず、此の後高波の變

はかり難く、溺死の難なしといふべからず、これによりて西入船町を限り、

東吉祥寺前に至るまで、凡そ長さ二百八十間餘の處、家居取拂ひ、空地となし置くものなり。

寛政六甲寅十二月日

——（小作中一度載之。——再録。）

繰返すやうだけれども、文字は殆ど認め難い。地に三尺窪んだやうに碑の半は埋まつた。

因にいふ、芭蕉に用のある人は、六間堀方面に行くがよい——江戸の水の製造元、式亭三馬の墓は、淨心寺中雲光院にある。

さて、時を、いへば、やがて五時半であつた。夏の日も、この梅雨空で、雨の小留んだ間も、蒸しながら陰が籠つて、家居は沈み、辻は黄昏れた。

團扇持つた六十年配が、一つ頸窪の蚊を敲いて立去るあとから、同伴は、兩切の煙草を買ふといつて、弓なりの辻を、洲崎の方へ小走りする。

ぼつねんとして、あとに、水を離れた人間の棒立と、埋れた碑と相對した時であつた。

皺枯れた聲をして、

「旦那さ——ん。」

「あ。」

思はず振向くと、ふと背後に立つて、暮方の色に紛るゝものは、あゝ何處かで見た：
 ……大びけ過ぎの遣手部屋か、否、四谷の閻魔堂か、否、前刻の閻魔王の膝の蔭か、否。
 ……いま今しがた白衣の鮮女が、道を掃いた小店の奥に、暗く目を光らして居た、鐵あみを絞
 つたやうに、皺の數を面に刻んで、白髪を逆に亂しつゝ、淺葱の筒袖に黒袴はいた媼
 である。万ちやんの淺草には、石の枕の一つ家がある。安達ヶ原には黒塚がある。こゝ
 のは僥倖に、檳榔の葉の様な團扇を皺手に、出刃庖丁を持つてをらず、腹ごもりの
 嬰兒を袍衣のまゝ掴んでもるない。讀者は、たゞ凄く、不氣味に、靈あり、驗あり、前
 世の約束ある古巫女を想像さるればよい。なほ同一川筋を、扇橋から本所
 の場末には、天井の裏、壁の中に、今も口寄せの巫女の影が残ると聞く。
 「水の音が聞こえまするなう。何處となくなう。」

「……………」

「旦那さ——ん、今のほどは汐見橋の上でや、水の上るのをば、嬉しげに見てござつた。

……濁り濁つた、この、なう、溝川も、堀も、入江も、淨めるには、まだく、汐が足り
 ませぬよ、足りませぬによつて、なう、眞夜中に来て見なされまし。——月にも、星にも、
 美しい、氣高い、お姫様が、なう、勿體ない、賤の業ちや、今時の女子の通り、目
 に立たぬお姿でなう、船を浮べ、筏に乗つて、大海の水を、さらくと、この上、この
 上に灌がつしやります事よ。……あゝ、有難うござります。おまゐりをなされまし、…
 ……おゝ、お連れがござりましたの。——おさきへ、ごゆるされや、はい、はい。」
 と、鳥居も潜らず、片檐の暗い處を、蜘蛛の巢のやうに——衣ものの薄さに、身の皺
 を、次第に、板羽目へ掛けて、奥深く境内へ消えて行く。
 「やあ、お待遠様。——次手に嘯新道とかいふのを、一寸……覗いて來たが…
 ……燕にしては頭が白い。あはははは、が、驚きました、露地口に、妓生のやうなのが三
 人ゐりましたぜ、ふはりくと白い服で。」

——忘れたのではない。私たちは、實はまだ汐見橋に、その汐を見つゝ立つてゐる。

富岡八幡宮

成田山不動明王

境内は、土を織つて白く敷けるが如く、人まばらにして塵を置かず。神官は厳肅に、僧達は靜寂に、御手洗の水は清かつた。

たゞ納手拭の黒く緞れたのが、吹添ふ風に翻つて、ぽたんと頬を打つた。遊廓の蠱を談じて、いまだ漱がざる腥き口だつたからであらう。威に恐れた事はいふまでもない。他にも、なほ二三の地、寺社に詣でたから、太く汚れ垢ついた奉納手拭は、その何處であつたかを今忘れた。和光同塵とは申せども、神境、佛地である。――近頃は衛生上使はぬことにはなつてゐるが、單に飾りとして、甚だしく汚れた手拭は、一體誰が預かり知るべきものであるかを伺ひたい。早い處は、奉納をしたものが心して。……清淨にすべきであらう。

謹んで參詣した。丁ど三時半であつた。まだ晝飯を濟ましてゐない。お小やすみかた／＼立寄つたのが……門前の、宮川か、いゝえ、木場の、きん稻か、いゝえ、鳥

の、初音か、いゝえ。何處だい！ えゝ、然う大きな聲を出しては空腹にこたへる、何處といひ立てる程の事も無い、その邊の、そ…ば…や…です。あ、あ。

「入らつしやい。」

しかし、蕎麥屋の方は威勢が良い。横土間で詠へを聞くのが、前鼻緒のゆるんだ、ペたんこ下駄で、蹠の眞黒な小婢とは撰が違ふ。筋骨屈竟な壯佻が、向顛卷、筋彫ではあるが、二の腕へ掛けて、笛、太鼓、おかめ、ひよつとこの刺青。ごむ底の足袋で、トン／＼と土間を切つて、「えゝお待遠う。」懇に注文した、熱爛を鷲掴みにしながら、框へ胸を斜つかけ、腰を落して、下睨みに、刺青の腕で、ぐいと突き出す——といった調子だから、古疊の片隅へ、裾のよぢれたので畏まった客の、幅の利かないこと一通りでない。

「餛飩を詠へても叱られまいかね。」

「何、あなた。品がきが貼出してある以上は、月見でも、どぢでも何でも。」

「成程。」

狭い店で。……つい鼻頭の框に、ぞろりとした黒の紹縮緬の羽織を、くるりと尻へ捲込むで、脹肥れさうな膏切つた股を、殆ど付根まで露出の片胡坐、どつしりと腰

を掛けた、三十七八の血氣盛り。遊び人か、と思はれる角刈で、その癖。パナマ帽を差置いた。でつぷりとして、然も頬骨の張つたのが、あたり芋を半分に流して、蒸籠を二枚積み、種ものを控へて、銚子を四本並べてある。私たちの、藪の暖簾を上げたとき——その壯佼を對手に、聲高に辯じてゐたのが、對手が動いたため、つと申絶えがしたので。……しばらく手酌で舐めながら、ぎろく、的のないやうに、しかしおのづから私たちに瞳を向ける。私はその銚子の藪をよんで、……羨んだのではない、酔ひの程度を計つたのである。成たけ背を帳場へ寄せて、窓越に、白く圓々と肥つた女房の擗がけの手が、帳面に働くのを力にした。怯えたから、猪口を溢すと、同伴が、そこは心得たもので、二つ折の半紙を懐中から取つて出す段取などあり。

「やあ、……聞きなよ。おい、それからだ。しかし忙しいな。」

私たちの詔へを一二度通すと、すぐ出前に——ポンと絆纏を肩に投げて、恰も、八幡祭の御神輿。(こののは擔ぐのではない、鳳凰の輝くばかり霄空から、舞降る處を、百人一齊に、飛び上つて受けるのだといふ) 御神輿に駈け著ける勢ひで飛び出した。その壯佼の引返したのを、待兼ねた、と又辯じかけた。

「へい、おかげ様で。……」

「蕎麥は手打ちで、まつたく感心に食はせるからな。」

「お住居は兜町の方だとおつしやいますが、よく、此の邊が明るくておいでなさいますね。」

「町内づきあひと同じ事さ、そりやお前、女が住んでる處だからよ。あは、は、は。」

「え、何うもお楽しみで。」

「對手が、素地で、初と來てるから、そこは却つて苦しみさな。情で苦勞を求めらるんだ。洒落れた處はいくらもあるのに——だが、手打だから、つゆ加減がたまらねえや。」

天麩羅を、ちゆうと吸つて、

「何しろ、お前、俺が顔を見せると、白い頸首が、島田のおくれ毛で、うつむくと、もう忽ち耳朶までポツとならうツて女が、お人形さんに着せるのだ、といつて、小さな紋着を縫つてゐるんだからよ。ふびんが加はらうぢやねえか、えへツへツ。人形のものだによ。てめえが好い玩弄の癖にしやあがつて。」

「また、旦那、滅法界な掘出しものをなすつたもんだね。——町越せば、蛤も、蜆も、山と積んぢやありますが、問屋にも、おろし屋にも、……おまけに素人に、そんな光つたのは見た事もありやしません。」

「光るつたつて硝子ぢやあねえぜ。……底に艶があつて、ほんのり霞んでゐる珠だよ。こいつを、掌でうつむけたり、仰向けたり、一といへば一が出る、五といへば五が出る。龍宮から授かつた賽ころのやうな珠だから、えへッえへッへッ。」

「あ、旦那、猪口から。」

「色香滴るゝ如し……分つてる。縁起がなくつちやあ眞個にはしめえな。何うだ？ 此を

みつけたのが、女衞でも、取揚婆でもねえ。盲目だ。——盲目なんだから、深川七不

思議の中だらうぜ。こゝらも流す事があるだらう。仲町や、洲崎ぢや評判の、松

賀町うらに住む大坊主よ。俺が洒落に鶴賀をかじつて、坊主、出来るから、時々

慰みに稽古に行くと思ひねえ。

（親一人子一人で、旦那、大勢に手足は裂きたくない、と申しますので、お情を遣は

され。）——かねて、熊井、平久、平野、新道と、俺が百人斬を知つてるから、

（特別のお情を。）——よし来た、早い處を。で、どうせ、あく洗ひをするか、湯がか

ないぢや使へない代ものだと思つたのが、……まるでもつて、其處等の辨天……」

「あゝ、不可え、旦那、私が必要な柄でいつちや、をかしいやうですがね、うつかり風説

はいけません。時々、貴女のお姿が人目に見えて、然もお前さん。……髪をお洗ひなさ

る事さへあるツて言ひますから。……や、話をしても、裸體の脇の下が擦つてえ。」

「それだよ、その通り、却つて結構ぢやねえか。本所の一ツ目を見ねえな……盲

目が見つけたのからして、もうすぐに辨天だ。俺の方でいほうと思つた。——いつか、

連をこまかす都合でな、隙潰しに開帳さして、其處等の辨天の顔を見たと思ひね

え、俺の玩弄品に、その、肖如さツたら。一寸驚いた。……おまけに、俺が熟と見て

ゐるうちに、瞼がぼツと來たぜ。……ウ。」

石榴の花が、パツと散る。

「あ、衄血だ。」

「ウーム。」

遊び人の旦那は仰向に呻つた。夥多しい衄血である。丁ど手にした井に流れ込むのを、

あわてて土間へ落したが、蕎麥も天麩羅も眞赤に成つた。鼻柱になほ迸つて、ぼた／

＼と蒸籠にした、り猪口に芴ねた血に、ぷんと、草の臭がした。

「お冷し申して……」

女房は土間へ片膝を下ろした。同伴も深切に懷紙を取つて立ちかけたが、壯俊

が屈竟だから、人手は要らない。肩に引掛けると、ぐなくと成つて、臺所口へ、

薄暗い土間を行く。四角な面は、のめつたやうで眞蒼である。

私たちは、無言で顔を見合はせた。

水道の水が、ざあ／＼鳴るのを聞きながら、酒をあまして、蕎麥屋を出た。

順はまた前後した。洲崎の辨財天に詣でたのは、此處を出てからの事なのである。

怪しき媼の言が餘り身に沁みたから、襟も身も相ともに緊張つて、同伴が嘖新

道を覗いたといふにつけても、時と場所がらを思つて、何も話さず、暮かけて扉なほ深

い、天女の階に禮拜した。

で、その新道を横に……小栗柳川の漕がした船は、むかしこの岸へ當つて土手へ上

つた、河岸を抜けて、電車に乗つた。木場一圓、入船町を右に、舟木橋をすぎ、

汐見橋を二度渡つて、町はまだ明いが、兩側は店毎軒毎に電燈の眩い門前

町を通りながら——並んでは坐れず、向ひ合つた同伴と、更に顔を見合はせたが、本

通りは銀座を狭くしたのとかはりのない、千百の電燈に紛れて、その蕎麥屋かと

思ふ暖簾に、血の付いた燈は見えなかつた。

門前仲町で下りたのは——晩の御馳走……より前に、名の蛤町、大島町

かけて、魚問屋の活船に泳ぐ活きた鯛を、案内者が見せようといふのであつた。
 裏道は次第に暗し、雨は降る。……場所を何う取違へたか、浴衣の藻魚、帯の赤魚、
 中には出額の目張魚などに出逢ふのみ。鯛、鱸どころでない。鹽、鯉のほひもしない。
 弱つたのは、念入に五萬分一の地圖さへ袂に心得た案内者が、路は悪くなる、暮
 れかゝる、活船を聞くのにあせるから、言ふことが、しどろもどろで、「何は、魚市
 は？……いや、それは知つてゐますが、問屋なんです。いえ、買ひはしません。生きた魚を
 見るのでして、えゝ死んだ魚……もをかしいが、ぴち／＼と吹上げて、しやあと落し
 雑とこの通り。勿ねる問屋もまだ可かつた。「水をちよろ／＼と吹上げて、しやあと落し
 てゐる處ですがね。」「親方……」——はじめ黒船橋の袂で、窓から雨を見た、床屋
 の小僧に聞くと、怪げんな顔をして親方を呼んだ、が分らない。——「兄さん、兄さん、
 一寸聞かがね。」二度目は蛤町二丁目目の河岸で、シヤベルで石炭を引掻いてる、
 職人に聞いた時は、慚愧した。「水をちよろ／＼、しやあ？……」と眞黒な顔で問
 ひ返して、目を白くして、「分らねえなあ。」これは分るまい。……
 「きみ、きみ。……ちよろ／＼さへ氣恥かしいのに、しやあと落すだけは何とかなるまい
 かね。あれを聞きたびに、私はおのづから、あとじさりをするんだがね。」

「卑怯ひけふですよ。……ちよろ／＼だけぢやあ意いをなしませんし、どぶりでもなし、滔たうたりでもなし、しやあ。」いふ下したから……「もし／＼失禮しつれいですが、ちよろ／＼、しやあ。……」

通りがかりの湯歸ゆがへりの船頭せんとうらしいのに叩頭おじきをする。

櫛くしまき巻まきを引詰ひつつめて、肉づきはあるが、きり、帯腰おびごしの引ひきしまった、酒屋さかやの女房かみさんが「問屋とんやで小賣こうりはしませんよ。」「何どういたして、それ處どころぢやありません。密そつと拜見はいけんがいたした

いので。「おや、ご見物けんぶつ。」と、金の絲切齒いときりばでにつこりして、道普請みちぶしんだの、建たてま

前へだの、路地ろぢうらは、地震ちしん當時たうじの屋根やねを跨またぐのと同おんなじで、分わかり悪にくいからと、つつかけ下げ

駄たで出て來きて——あの蕎麥屋そばやの女房かみさんを思おもはせる、——圓まるく々くした二にの腕うでをあからさまに、

電燈でんとうに白しろく輝かがやかしながら、指ゆびさしをして、掃溜はきだめをよけて、羽目はめをまはつて、溝板どぶいたを跨また

いで、ぐらく／＼してゐるから氣きをつけて、まだ店開みせびらきをしない、お湯屋ゆやの横よこを抜ぬけた：

…その突き當つあたりまで、丁寧ていねいに教をしへて、「お氣きをつけなさいまし、おほ／＼。」とあだに

笑わらつた。どうも、辰巳たつみはうれしい處ところである。

問屋とんやは、大六だいろく、大京だいきやう、小川久をかがひさ、佃勝つくだかつ、西辰にししたつ、ちくせん——など幾軒いくけんもある、

と後に聞きいた。私わたしたちは單たんに酒屋さかやの女房かみさんにをそはつた通り、溝板どぶいたも踏ふみ返かへさず、塚つかにも

似にて空地あきちのあちこち、蠅かきはまぐり、蛤からうたかの殻堆からうたかく——（ばいすけ）の雫しづくを匆はねて並ならんだのに、磯濱いそはま

づたひの思ひしつゝ、指さゝれたなりに突き當りの問屋。……

店頭にもない。幅廣な構内の土間を眞向うに、穴藏が暗く、水氣が立つて、突通しに川が透く。――あすこだ。あれだ。

のそくと入つた案内者が、横手の住居へ、屈み腰で挨拶する。

「水がちよろく。」

……をやつてゐるに違ひない。私は卑怯ながら、その町の眞中へ、あとじさりをしたのである。

「さ、おいでなさい、許可になりました。」

活船――瀧箱といふのであつたかも知れない。――が次第に、五段に並んで、十六七杯。水柱は高く六尺に昇つて、潺々と落ちて小波を立てて溢れる。

――あゝ、水柱といつて聞けばよかつた。――活船に水柱の立つ處と。――ぬれいたじき濡板敷のすべる足もとに近い一箱を透かすと、小魚が眞黒に瀬を造る。

「泳いでゐます、鱒ですよ。」

「鱒だぜ。」

と、十五六人、殆ど裸にして、立働く、若衆の中の、若いのがいった。

同伴は器用で、なか／＼庖丁も持てるのに。——これを思ふと、つい、この頃の事である。私の極懇意な細君で、もと柳橋で左袂を取つたのが、最近、一番町のこの近所へ世帯を持つた。お料理を知つて、洗方に疎だから、——今日は——の盤臺を、臺所口からのぞいて、

「まあ、い、鮎ね。」が、鱈である。翌朝、「あら、活きた鯉ね。」と、いはうとして……昨日に懲りて口をつぐんで、一寸容儀を調べた、が黒鯛。これは優しい。……

信濃國蒲原郡産の床屋職人で、氣取つたのが、鮨は屋臺に限る、と穴子をつまんで、「む、この鮓はうめえや。」以て如何とすると、うっかり同伴に立話をする、と、三十幾本の脚が、水柱に大揺れに揺れて——哄と笑つた。紛れ出た小鮓が、ちよろ／＼と板敷を這つてゐる。

一同は働き出した。下屋の水窓へ、折から横づけの船から、穴子、ぎんぼうの畚、鰈、あいなめの鮓盤臺を、掬ふ、上げる、それ抱き込む、大鯛の洩刺たるが、(大盤臺)から飛び上つた。

この勢ひに乗じて、今度は、……そ……ば……や……ではない。社の高信さんの籌略によつて、一陣の鋭兵が懷に伏せてある。……敵は選ばぬ、それ押出せ、といふと、兜

を直す、同伴の頭は黒く見える。

雨をおよぎ出した町の角も、黒江町。火の見は、雫するばかり、水晶の塔かと濡れて光つて、夜店の盤臺には、蟹の脚が白く土手を築き、河豚かと驚く大鯛が反つて、蝦のぶつ／＼切が血を洗つた。

加賀家、きん稻、伊勢平と、對手を探つて、同伴は、嘗て宮川で、優しい意気な人と手合をした覚えがあると頻にはやつて、討死をしようとしたが。——御免下さい：

：お約束はしましたけれど、かう降つて来ては持ち出さないわけには行かない、蝙蝠傘にて候ゆるゑ、近い處の境内の初音を襲つた。

「お任せ申す。」

「心得たり。」

こゝに至ると、——實は、二上りの音じめで賣つた洲崎の年増と洒落れた所帯を持つた同伴が、頭巾を睨いで、芥子玉の頬被した鶉に成つた。案するに、ちよろ／＼水も、くたびれを紛らした申戯らしい。

「……姉さん、一寸相談があるが、まづ名のれ、聞きたいな。」

をかしかつたのは、大肥りに肥つた、氣の好い、深切な女中が、ふふふ、と笑つ

てばかり、何うしても名告らなかつた、然もありません、あとで聞くと、……お糸さん。
 で、その、肥つたお糸さんに呑込まして、何でも構はぬ、深川で育つた土地ツ子を。

若い鮮麗なのがあらはれた。

先づは、めでたい。

うけて、杯をさしながら、いよく黒くなつた鵜が、いやが上におやぢぶつて、

「姉さんや、うまれは、何處だい。」

聲の下に、かすりの、明石の白緋で、十七だといふのに、紅氣なし、薄い紫陽花
 色の半襟くつきりと涼しいのが、瞳をぱつちりと、うけ口で、

「濱通り……」

「はま通り?……」

めいりやうかんけつ
 明亮簡潔に、

「蛤町。」

昭和二年七月―八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「東京日日新聞 第一八二七五号〜第一八二九六号」東京日日新聞社

1927（昭和2）年7月17日〜8月7日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「串戯」と「串談」、「燈《ひ》」と「灯《ひ》」の混在は、底本通りです。

※「女房」に対するルビの「にようぼう」と「かみさん」、「工場」に対するルビの「こうば」と「こうぢやう」、「兄哥」に対するルビの「あにき」と「あにい」、「旦那」に対するルビの「だんな」と「だな」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「深川《ふかがは》浅景《せんけい》」となっています。

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2018年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

深川浅景

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>